

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第40回 第10.1.9節～第10.1.12節

2019年8月15日

小田 勝

279頁第10.1.9節の前に、節を新設する。

10.1.8' 属性形容詞／感情形容詞(新設)

「長し・青し・重し」のように物事の属性を表す形容詞を「属性形容詞」、「嬉し・悲し・淋し」のように感情を表す形容詞を「感情形容詞」という。

◆現代語では、一般に「-がる」を付けてみることで、両者を判別することができる。

・{嬉し／悲し／*長／*青}-がる。

例えば、このテストから、現代語の「重い」は属性形容詞、「重たい」は感情形容詞であることがわかる(*重がる／重たがる)。

感情形容詞は、人の感情を表すほか、他動的に「人にその感情を起こさせる」の意でも用いられるから、注意が必要である。例えば「^{つら}辛し」は、「苦しい・耐えがたい」の意のほか、「(相手を苦しくさせる→)薄情である」の意、「^{かたじけなく}恥づかし」は「きまりが悪い」の意のほか、「(相手をきまり悪くさせる→)立派だ」の意でも用いられる(現代語でも、「つまらない人」は、「つまらないと思ってる人」と「人をつまらなくさせる人」との両義がある)。

「10.1.9 形容詞の格支配」では、280頁用例(2)～(6)の類例、

・土佐の足摺の岬と申す所がゆかしくて侍る時に(とはずがたり)

同頁～281頁用例(7)～(15)の類例を追加する。

・海山も隔たらなくに何しかも自言(=会ッテ語リアウト)をだにもここだ乏しき(万689)

「…を+形容詞」の形で、形容詞を他動詞的に用いたと思われる例もある。

・[源氏ハ]かのおしなべてには思したらざりし人々(=源氏ノ召人達)を御前近くて(=近クシテ。近クニオ召シニナッテ)、かやうの御物語などをし給ふ。(源・幻)

281 頁 1 つ目の◆の類例、

- ・[薫ガ] 恨み給ふをことわりなるよしを[弁ガ大君ニ] つぶつぶと聞こゆれば(源・総角)

同頁 2 つ目の◆の類例(「とに通うの」の例)を追加する。

- ・秋霧のともに立ち出でて別れなばはれぬ思ひに恋ひやわたらん(古今 386)
- ・げに仲忠の等しき[涼ノ] かたちなるを見るままに(うつほ・吹上上)

用例(16)(17)は、比較の文。次例は、劣等比較の例である。

- ・[楽道ニヨッテ] 龍顔に咫尺(=近侍) 仕りけるといふは、ものを余の家より少なく 知れりける高名によりてなり。(文机談)

用例(18)は、初刷・第2刷で「同じく紅」とあったのを、第3刷で「同じ紅」に訂正した。また、同頁3つ目の◆で「後世…現れる」とした「…と同じ」は、中古から存するので訂正する。

- ・されど、初めのそへ歌と同じやうなれば(古今・仮名序)
- 「10.1.11 形容詞の並置」、283 頁③([終止形—連体形]+名詞)の類例を追加する。
- ・父子三人、孝道・孝時・孝行、様々の芸能どもを尽くしけるに、をかしあさましきこと侍りけり。(文机談)

次のような連用修飾語は、並置された形容詞の双方に係る。

- ・御遊びがたきの童べ、児ども、いとめづらかに今めかしき御ありさまどもなれば(源・若紫)

283～284 頁「10.1.12 形容詞の強調形」の類例を追加する。

- ・心地悩ましくて日数積もるに、さらでもはかなくもはかなきに(中務内侍日記)

また、「あなうれしともうれし。」(源・玉鬘)、「あなゆゆしともゆゆし。」(堀・虫めづる姫君)のような句型もある。

「ただ+形容詞語幹+に+形容詞+なる」は、「ただもうどンドン…」の意を表す。

65 頁に、第 2.12.2 節用例(14)として 1 例あげたが、類例を追加する。

- ・まことに巳の時ばかりに三十騎ばかりこりて(=一団トナッテ)来るあり。…ただ近に近くなりてはらはらと[馬ヨリ]おるるほどに(宇治 1-18)
- ・「京の方より火の多く見え候ふ」と申しければ、あやしみ思へるに、「よく見よ」と仰せられけるほどに「ただ多に多くなり候ひて…」と申しければ(愚管抄)